『坊つちやん』小考
――坊っちゃんの性格と清の役割を中心に――

李　淑暎

1．はじめに。

私が『坊つちやん』を読んで初めて気付いたのは，いろいろな性格がおもしろく描写されていることであった。登場する人物が，それぞれ一人残らず，特徴のある性格を持っていて興味深い。むだな人物は登場していないと言ってしまっても過言ではないであろう。その中で一番目につくものは，やはり坊っちゃんの正直さ・卒直さ・善と，赤シャツの善を仮装した為善・悪の対照であろう。

また，坊っちゃんといつも坊っちゃんをかばってくれる唯一の人である下女清との関係もなかなかおもしろい。肉を離れた神秘的で，精神的な一種の愛情を共有している者として描かれているのではないかと思う所がある。

それで，私はこの小論文を通して『坊つちやん』の中に出て来る人物の性格（特に主人公である坊っちゃんの性格）と，坊っちゃんと清との精神的な愛について述べてみたい。

2．坊っちゃんの性格について。

まず，坊っちゃんの性格を一口で言えば，単純　そのものではないか　と思われる。坊っちゃんは何事に対しても複雑には考えない。いや，もともと複雑に難しく考えること，それ自体を拒否しているかも知れない。それは『坊つちやん』の冒頭の第一行「親譲りの無鐵砲で小供の時から損ばかりして居る」（一）[1]にもよく表われている。子供の時から無鉄砲で損ばかりして来たけれど，それについて全然後悔とか未練などは持っていない。むしろ　堂々と言っている気さえする。二階から飛び降りて腰を抜かしたり，ナイフで親指の甲を切ったりしたことは，坊っちゃんの性格の単純さを明らかに裏付けているのである。このような行動は二つとも同級生のからかいに対して，反抗や意地を見せようとした結果であった。一見して見れば，そんなばかばかしい人がいるだろうか　と思うかも知れないが，それがかえって読者に『坊つちやん』という小説に興味を持たせる重要な要因として働いているのではなかろうか。

このような単純な性格を持っている坊っちゃんの行動は，世間には反抗，意地っ張り，乱暴と見られる。常識的に考えればかわいがってくれるはずの両親にさえもかわいがられていない。

> 母も死ぬ三日前に愛想をつかした――おやぢも年中持て餘してゐる――町内では亂暴者の惡太郎と爪彈きをする（一）[2]

つまり坊っちゃんは，世の中のだれにもかわいがられていないのである。これについて坊っちゃん自身は別に気にしていない。しかしただ一人　坊っちゃんをむやみに珍重にしてくれる人がいる。それは下

女の清である。清だけが坊っちゃんの内面にかくれている，素朴な純粋さ，正直さ，正義感，義侠心などを正確に見ている。だから清が口にしている「坊っちゃん」という呼称は，のだいこや生徒たちが使っているようにからかいの意味はまったく見えない，尊敬の意味を帯びているのである。

実に単純な坊っちゃんの性格は素朴で純粋な一面を持っている。しかしその反面　見のがしてはならないのは坊っちゃんの十分な思考の欠如である。「親譲りの無鐵砲」と自分でも言っているように，坊っちゃんは物事の前後を冷静に考える余裕を持っていない。まっすぐ行動に走ってしまうのである。物理学校に入学したことや，松山の中学校に赴任したことなどは「坊っちゃん」のこの性格を反映した行動をよく表わしている。このように思考より行動が先に立つということが『坊っちゃん』という小説が持っている明快な滑稽味である　と言えるであろう。

松山中学校に赴任して来た坊っちゃんは，同僚たちにそれぞれあだ名をつける。その人の見かけと坊っちゃんがはじめて見た感じによってその場でつけるあだ名であるけれども，それぞれの人を端的に表わす重要な意味を持っている。

> 校長は狸，教頭は赤シャツ，英語の教師はうらなり，數學は山嵐，畫學はのだいこ。（二）[3]

その人その人の性格がこのあだ名に絶妙に秘められているのがおもしろい。

では，ここで坊っちゃんの見方で描写され，あだ名が付けられた根拠をもっとくわしく取り上げて見よう。校長は「薄髯のある，色の黒い，眼の大きな狸の様な男であり」，教頭は「妙に女の様な優しい聲を出す人」「年が年中赤シャツを着る」男である。英語の教師古賀は「大變顔色の悪るい男」「此男は蒼くふくれて居る」「うらなり許り食つてるに違いない」と判断され，數学の教師堀田は「逞しい毬栗坊主で，叡山の悪僧と云ふべき面構である」り，画学の教師は「全く藝人風」で，「御國はどちらでげす」と江戸っ子風を自慢する人物である。おおざっぱに列挙して見ると，坊っちゃんがそれぞれの人を見て感じる感想は，だいたい上のようだ。

このようにくわしく観察して見ると，ほんとうに坊っちゃんが付けたあだ名は外見によるものである同時に，その外見がその人その人の性格をそのまま反映しているのが分かる。それでその後はずっとあだ名で通している。それも全然無理がない。その理由はあまりにもその人その人の特徴と言うものを，正確にとらえたからではないであろうか。坊っちゃんの単純で澄んだ目には，その人物のそのままの姿がうつし出されるのであると言えるであろう。

また一方では，このように同僚たちにあだ名をつけることによって坊っちゃんの内面の矛盾を見ることができる。坊っちゃんは，生徒たちがあたらしく東京から赴任して来た坊っちゃんに，「天麩羅先生」とか「團子」とか「赤手拭い」とか名づけてあれこれ干渉したり，宿泊の日にふとんの中にバッタを入れたりしたことについては，敏感に

反応して大いに怒っている。これと上に述べたあだ名を付けることとはもちろん違う。後者は表面化した行動として生徒たちみんなが教室などで坊っちゃんをはやしたてている。だから坊っちゃんはそれで苦労していることになる。しかし前者の場合は坊っちゃん一人の考えですむのである。坊っちゃんがあだ名を使うのは清への手紙の中であり，本人の前でそれを使うことはない。しかし，この二つは微妙な類似点を持っている。それは人のことを自分かってな解釈で考えてしまうことである。だからここで見える坊っちゃんの矛盾というのは，生徒たちが自分にしたことには怒り，自分がしたことは全然気にしていないということである。ただ生徒の行動だけをとりあげて批判しているのである。これについて片岡良一氏は「目くそが鼻くそを笑う類でしかないこと」[4]と言っている。

以上のように，坊っちゃんの性格はきわめて簡単明瞭な単線によって形づくられているのである。[5]物心もついていない時から家族愛というのを感じられなかった坊っちゃんは，父親とか母親に愛されていないということで大きく心をきずつけられていた。それで結局，それはそれでいいと言うふうにあきらめたかも知れない。そして，あきらめることによって何か――親の愛・人からの好意など――を得ようとして複雑な手段を弄することをせず，思ったままの単純な思考をして直線的に行動に移るのである。「人間は好き嫌で働らくものだ。論法で働らくものぢゃない」（ハ）坊っちゃんにとっては，人を働かすものは感情なのである。また，勇み肌で義侠心にも富んでいる坊っちゃんは一旦なにか考えたら，すぐそれを実践してしまう。それがどうなるか先のことは全然頭にない。悪く言えば軽卒である。

そのため，坊っちゃんが正しいとかたく信じて行なった行動は，悪い方向に進むことが多い。でも坊っちゃんは，それで悩んだり，長く考えたりしない。「おれは何事によらず長く心配しやうと思つても心配が出来ない男だ」。（ニ）自分が善・正として行なった行動だから後はどうなってもいい。まったく結果は気にしない性格とも言えるし，どうせ結果が失敗だったら後であれこれ考えても仕方がないと，あっさりあきらめてしまう性格とも言えるであろう。

つまり坊っちゃんの行動は，いい結果をきとめて行なわれるわけではない。ただ，正義は必ず勝つと言う信念があるだけなのだ。このようなかたい信念とともに，それを通そうとする根気ものぞかれる。これは坊っちゃんのふとんのなかにバッタを入れた生徒たちが責任をのがれるために卑怯な行動をするのを見て憤慨した坊っちゃんの一人言にもよく表われている。

> 世の中に正直が勝たないで，外に勝つものがあるか，考へて見ろ。今夜中に勝たなければ，あした勝つ。あした勝てなければ，あさつて勝つ。あさつて勝てなければ，下宿から鞄を取り寄せて勝つ迄こゝに居る。（ロ）[6]

このように単純で純粋な坊っちゃんの考え方，行動にわれわれ読者はひき込まれるのである。読んでいるうちに，坊っちゃんの行動に半ばあきれながらも，だんだん坊っちゃんを愛するようになるのであろ

う。

明治時代に書かれた『坊っちゃん』は，現在も世間一般に広く読まれている。それは以上で述べたような彼の性格が，読者の心に大きくひびくものがあるからである。高度文明の複雑な社会の中で，いろいろなことを気にしながらこせこせ生きて行く現代の人々は，こういう坊っちゃんを通していささか軽卒で，浅薄かも知れないけれども，単純で素朴な生き方を味わって見るのではないか。そして，大切なものや正しいものは，実に単純で素直なものだと気づかされる。漱石もまた，考えて結果ばかりをみとおそうとするため，行動できず行きづまっている知識人と正反対の坊っちゃんを描くことによって，彼の苦悩の一部を一時でも解放したかったのではないであろうか。

ろ．坊っちゃんと清との精神的な愛について。

全部で十一章に分かれている『坊っちゃん』の中で，実際に清が登場しているのは，最初の第一章と最後の十一章にすぎない。最初の第一章では，血のつながった肉親にもかわいがられていない坊っちゃんを実様にかわいがってくれる唯一の人としての清が書かれている。そして最後の十一章では，四国から帰って来た坊っちゃんと清との再会と清の死が描かれている。それも十一章全般にわたって書かれているのではなくて，最後のほんのすこしに過ぎない。しかし，清の存在は『坊っちゃん』という小説の全体を通して大きな役割を果している。

> 只清は昔風の女だから，自分とおれの關係を封建時代の主従の様に考へて居た。（一）[7]

実に，清は坊っちゃんに献身的な愛を注ぐのである。それで読者は清の目を通して坊っちゃんの善と言うものを見いだすことができる。一方清の善は，坊っちゃんの目を通して見ることができる。なぜならば，四国に行って困難な事件に出あうたびに，坊っちゃんは清のことを考えることによってわかる。せちがらい世間のことを一つ一つ経験して行くことにつれて，清の人としての善さを切実に悟るのである。

> おれは空を見ながら清の事を考へて居る。金があって，清をつれて，こんな奇麗な所へ遊びに来たら嘸愉快だらう。いくら景色がよくつても野だ抔と一所ぢや詰らない。清は鰹節茶だらけの婆さんだが，どんな所へ連れて出たつて恥ずかしい心持ちはしない。（五）[8]

> こんな土地に一年も居ると，潔白なおれも，この真似をしなければならなく，なるかも知れない。……（中略）……さうなつては江戸っ子も駄目だ。駄目だが一年もかうやられる以上は，おれも人間だから駄目でも何でも左様ならなくちゃ始末がつかない。どうしても早く東京へ歸つて清と一所になるに限る。（十）[9]

他にもいろいろ清のことを思い出す所が見えるが，上に上げた引用

文では，いちばん切なく清のことを思っている。坊っちゃんにとって清は，たんなる下女ではないことを明らかにしている。心を支えてくれる信仰に近い感情の対象であり，帰るべきふるさとの意味を持っているのである。坊っちゃんの結婚は記されていないし，読者は坊っちゃんの妻を想像する余裕を与えられていない。[10]それは精神的な恋人として清が坊っちゃんの心の深い所に置かれているからではないであろうか。

坊っちゃんが大人になり，たとえば家庭を持つならば，そこに清のいる場所はないであろう。下女としての清はいるかも知れないが，そこには坊っちゃんの精神的な支え，純粋な愛情関係を共有する者としての清は存在することができない。その役目は妻がはたすものであるだろうからである。坊っちゃんの「お坊っちゃん」的な性格が，清との純粋な愛情関係をつくっていたのであり，坊っちゃんが成長した大人になり，坊っちゃんでなくなるからこの関係は成り立たなくなる。そのために漱石は『坊つちやん』の終りで清の死を知らせるのである。この清の死によって，坊っちゃんは坊っちゃんであることをやめるのであるが，しかし完全にそれをわすれるわけではない。むしろこのことによって，清との関係は坊っちゃんの中で完全なものとなるのである。

> 死ぬ前日おれを呼んで坊つちやん後生だから清が死んだら，坊つちやんの御寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊つちやんの來るのを樂しみに待つて居りますと云つた。だから清の墓は小日向の養源寺にある。（十一，傍点は筆者）[11]

現実としては遂げられない精神的な愛であったから清は死ぬのである。ここで注目しなければならないのは，引用文の「だから」という言葉である。「坊っちゃんは清の願いをかなえている」[12]のである。取るに足らない一人の下女を自分の菩提寺である養源寺に埋めてやるというのは，すでに坊っちゃんが清を下女ではない信頼できる，そして品たかく美しい心の恋人としてとらえているからではないだろうか。

> おれは清から三圓借りて居る。其三圓は五年經つた今日迄まだ返さない。返せないんぢやない，返さないんだ。清は今に返すだらう抔と，苟めにもおれの懐中をあてにはして居ない。おれも今に返さう抔と他人がましい義理立てはしない積だ。こつちがこんな心配をすればする程清の心を疑ぐる樣なもので，清の美しい心にけちを付けると同じ事になる。返さないのは清を踏みつけるのぢやない，清をおれの片破れと思ふからだ。（六）[13]

これは山嵐におごってもらった氷水のお金を返そうと決心して，清のことを思い出す場面である。もう信頼できなくなった山嵐に恩を着るのは，坊っちゃんにとってはたえがたい恥である。しかし清に対しては，坊っちゃんは「他人がましい義理立てはしない積」とか，「清をおれの片割れと思う」と言うのである。まさに坊っちゃんにとって

清は，心から信頼している対象でありつづけており，伴呂に近い者であると言わざるをえない。すなわち，清は坊っちゃんが帰って来るのを待っている彼岸の妻になるのではないであろうか。

これが回想風になっていると言うことからも坊っちゃんがおそらく大人になっている現在でも，坊っちゃんであった頃のことをわすれていないことがわかるのである。また，描かれている清はつねに善良であり，坊っちゃんは清との美しく幸福な感情を持ちつづけている。

善と言うのは過去の思い出のものだが，坊っちゃんはそこに参りつづけるであろうし，坊っちゃんの心の中で清は，いつまでも生きているのである。

注

1）夏目漱石『坊っちゃん』「『漱石全集』第二巻」岩波書店 1976 p 241
2）注1）と同じ p 244
3）注1）と同じ p 260
4）片岡良一『夏目漱石の作品』厚文社 1955 p 69
5）坂本 浩『夏目漱石 ― 作品の深層世界 ―』明治書院 1979 p 64
6）注1）と同じ p 279
7）注1）と同じ p 251
8）注1）と同じ p 287 ～ p 288
9）注1）と同じ p 354 ～ p 355
10）平岡敏夫『漱石序説』塙書房 1976 p 80
11）注1）と同じ p 382 ～ p 383
12）村上嘉隆『漱石文学の人間像』哲書房 1983 p 16
13）注1）と同じ p 294 ～ p 295

参考文献

1）夏目漱石『坊っちゃん』「『漱石全集』第二巻」岩波書店 1976
2）片岡良一『夏目漱石の作品』厚文社 1955
3）坂本 浩『夏目漱石 ― 作品の深層世界 ―』明治書院 1979
4）平岡敏夫『漱石序説』塙書房 1976
5）村上嘉隆『漱石文学の人間像』哲書房 1983
6）相原和邦『漱石文学の研究』明治書院 1988
7）荒 正人『評伝 夏目漱石』実業之日本社 1960